

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

## （近刊著書紹介）稲垣恭子[編] 『教育文化を学ぶ人のために』

著者	岩田 弘三
雑誌名	The Basis : 武蔵野大学教養教育リサーチセンター 紀要
号	2
ページ	181-182
発行年	2012-03-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1419/00000535/">http://id.nii.ac.jp/1419/00000535/</a>

(近刊著書紹介)

## 『教育文化を学ぶ人のために』

(稲垣恭子[編]、世界思想社、2011年4月20日刊)

岩田 弘三

本書は当初は、『教育社会学を学ぶ人のために』（柴野昌山[編]、世界思想社、1985年）の新版として企画された。しかし、提出原稿がそろった頃あたりに、書名が変更されることになった。つまり、この本は基本的には、教育社会学の教科書であるといつてよい。しかし、なぜ「教育社会学」という確立した学問分野の名称を使用せず、「教育文化」という新しい名称をあえて用いたのか。それは、編者の手になる、「なぜ教育文化論か——序論にかえて」を読めば、その問題意識が明らかになる。この点は、本書出版の目的・意義とも関連することである。そして、そこでは章構成を含めて、本書の内容が上手く要約されているので、まずそれをもとに、本書全体の概要を紹介しておこう（以下の引用はすべて、ここからの引用）。

「教育によって何が得られるのかという問い」に対する、教育学的アプローチとしては、基本的には2つのスタンスがある。第1が、「教育＝学歴を得ることが高い収入や社会的地位につながっていくのだという、いわば教育をツールとしてとらえるみかた」である。別の言い方をすれば、教育の「道具的・手段的」側面に注目するアプローチである。第2が、「そうした計測的な教育の成果だけではなく、人格の涵養とか個性の伸長あるいは教育愛などのように、客観的に測りにくく、また実用的・功利的な目的に還元できないようなところ」を「強調」するアプローチ方法である。前者のような見方を志向してきたのが教育社会学である。しかし、少し前までは、教育学の分野における主流は、あくまで後者のようなアプローチ方法であり、そこから外れた教育社会学は、教育学分野では、長らく傍系・継子扱いされてきた。ところが、「教育に効率とわかりやすい成果を求める社会的な関心やニーズ」の高まりのなかで、「近年においては、人格形成とか教育的出会いといった議論は後退し、教育を計測可能なアウトプットによって、評価する合理的で道具的なみかたのほうが、教育の『表の顔』になりつつある。教育社会学的なとらえかたが教育の常識的なみかたになってきた」。このように、「教育をその道具的側面からとらえる志向が全面化していく一方で、それとは逆に計算や効率を超えた他者との関係、信頼とか、かけがえのなさといった価値、あるいは儀礼やたしなみといった文化的慣習に対する新たな関心や憧れが顕在化しつつある。教育を道具的な視点からとらえるみかたへのリアクションが、さまざまな形で出現して」きた。そこで、「教育への道具的な関心とは異なる教育文化現象に焦点をあて、その意味を社会学的な視点から読み解いていくことをめざした」のが、本書である。

そのような趣旨のもとに、本書の構成は、以下のとおりになっている。

### 第I部 現代の教育文化

#### 第1章 教育のニューメディア幻想（佐藤卓己）

- 第2章 キャンパス文化の変容 (岩田弘三)
- 第3章 教育達成と文化資本の形成 (片岡栄美)
- 第Ⅱ部 学校空間と教育言説
  - 第1章 儀礼＝神話空間としての学校 (山本雄二)
  - 第2章 教育問題と教育言説 (北澤毅)
  - 第3章 教育イデオロギーとしてのアスレティズム (デビッド・ノッター)
- 第Ⅲ部 社会化と超社会化
  - 第1章 家族と子どもの社会化 (清矢良崇)
  - 第2章 引退論序説——「降りること」の困難さについて (亀山佳明)
- 第Ⅳ部 教養とアカデミズムの変容
  - 第1章 教養の制度化と利害衝突 (山口健二)
  - 第2章 立身出世主義にみる文学少年の時代 (目黒強)
  - 第3章 アカデミック・コミュニティのゆくえ (稲垣恭子)

ここでも、編者の言葉をもとに、各章の内容を要約しておこう。第Ⅰ部では、「メディア、学生文化、文化資本とジェンダーをキーワードに、広い視野から現代の教育文化現象を分析し…マクロな視点から現代の教育文化を読み解く視点が提示されている」。第Ⅱ部では、「学校における儀礼の意味、教育問題をめぐる言説構成、学校スポーツと身体の形成という視点から、それぞれ学校空間の意味について論じている。いずれも教育の道具的な視点からは解明できない側面に光をあてることによって、学校なるものの特質を浮き彫りにしている」。第Ⅲ部では、「社会化概念の検討を通して、社会の一員になること、社会から降りることの意味を改めて問おうとしている」。第Ⅳ部では、「教育の合理化と制度化の利害衝突のダイナミックな過程、近代日本における文学少年の立身出世主義と教養、師弟関係の変容とアカデミック・コミュニティの現在」について、「理論的、歴史社会的な角度」から、「ツール化する現代の教育における教養とアカデミズムの意味を再考している」。

本書のなかで、紹介者は、第Ⅰ部の第2章「キャンパス文化の変容」を担当した。そこでは、「学生文化」、「教養主義」、「大学の学校化」、「学生の生徒化」をキーワードにして、歴史的視点を踏まえて、最近の学生気質の変化を論じた。その第1の変化は、「学生の生徒化」である。「指示待ち世代」という呼称が示すように、高校時代の延長として、受け身の姿勢で、授業にはまじめに出席する。しかし、読書はしないとといったように、能動的に学習することは少なくなってきた。以上に端的に代表されるような、最近の学生気質の変化のことである。より身近な例でいえば、自分のことを「学生」ではなく「生徒」と呼ぶ大学生が多くなってきた。つまり、精神的に「学生」になったとの自覚をもてず、「生徒」のままの若者の増加傾向は明らかである。第2の変化は、最近の学生の「実用主義志向」、つまり「職業生活に直結した」、いわゆる「役に立つ」学問志向の高まりである。そして、それにとまなう「役に立たない」学問、つまり「教養主義」文化の衰退である。

紹介者の担当章についていえば、このような最近の学生気質を知るためにも、一度手に取っていただければ、と思う本である。それだけではなく、もちろん他の章でも、近年の教育問題を考える上で有益な示唆が得られることは、いうまでもない。